

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	身体感覚を伴う慣用語句の習熟にみる小学生の感情発達について
Author(s)	山口, 和子
Citation	児童の言語生態研究 , 7 : 24 - 30
Issue Date	1975-05-24
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045079
Right	
Relation	



III 身体感覚を伴う慣用語句の習熟 にみる小学生の感情発達について

山口和子

慣用語句という言い方もまた慣用であって、本来慣用されない語句などあるう答はない。にもかかわらず、ある種の語句を特に慣用語句と言いつつ、慣用して来たのは、他の語句とは区別される慣用の仕方を知っているからである。この特殊な慣用の仕方というのは、感覚・感情に訴えられ、その感覚・感情においてその気になられたものといえる。従って、われわれは既成の慣用語句を習熟することによって、われわれの感覚・感情に発現の型を与えているともいえる。このことを更に立場をかえていえば、この慣用語句を生成したのはわれわれの先祖で、慣用語句を生成とはいっても、実は、語句が先にあるのではなく、感覚・感情の発現のかたちを伝えて来たといふべきなのである。故にわれわれの習熟といえども、その伝承中にあることを思えば、慣用語句は既成であったも、その感覚・感情の発現の型は既存している。

こう考えて来ると、現在の子どもたちも、こうした慣用語句の習熟にどんな実態を示しているかは重要な関心事となる筈である。つまり、日本人が日本人としての感覚・感情の発現の型をどう伝承するものであるか、また年令的には日本人の感覚・感情の発現の仕方はどう変化することをもって、より日本的だといえるか、また、日本語

を中心とした見方においても、その習熟の難易をめぐって、日本人が日本語をどう扱おうとしているのかという慣用というくせに至る問題等々がある筈である。

一、調査方法と手続

れわれは慣用語句のうち身体の一部を含む語句に限定し次の如き問題を作製した。

もんだいA型 年組 なまえ

つぎのことばと同じ意味のものを□の中なまえの語群からえらんで()の中に記号で書きましよう。

1. 歯がたたない ()
2. 大きな口をきく ()
3. 目にあまる ()
4. 顔まけ ()
5. 足もとをみる ()
6. 大目にみる ()
7. 目を細くする ()
8. 骨身にこたえる ()
9. 歯がゆい ()
10. もみ手をする ()
11. 目にもみせる ()
12. 口がすべる ()
13. すずしい顔 ()
14. へそをまげる ()
15. 腹をさぐる ()
16. 目と鼻のさき ()
17. 肩をならべる ()

18. 背をむける ()
19. 背に腹はかえられぬ ()
20. 胸がわるい ()

(イ)	じれったい
(ロ)	あいてがつよすぎる
(ハ)	はったり
(ニ)	見ていられない
(ホ)	すぐ近く
(ヘ)	かんぐる
(ト)	あきれる
(チ)	よわみにつけこむ
(リ)	みてみぬふりをする
(ニ)	ほほえましい
(ホ)	つらい
(ヘ)	ほんばつする
(ト)	おべっかをつかう
(リ)	おもいしらせる
(ニ)	うっかりいってしまう
(ホ)	はりあう
(ト)	へいき
(リ)	きげんをわるくする
(ニ)	どうにもならない
(ホ)	むかつく

- もんだいB型 年組 なまえ
- つぎのことばと同じ意味のものを□の中なまえの語群から、えらんで()の中に記号でかきましよう。
1. 大きな顔をする ()

- 2. 鼻もちならない ()
- 3. 手玉にとる ()
- 4. 頭があがらない ()
- 5. 後指をさされる ()
- 6. 目を光らす ()
- 7. 耳がいたい ()
- 8. 首を長くする ()
- 9. 面あて ()
- 10. 手も足もでない ()
- 11. 尻に火がつく ()
- 12. 唇をかむ ()
- 13. 胸がおどる ()
- 14. のどから手がある ()
- 15. 面の皮があつい ()
- 16. 手のうらかえす ()
- 17. 歯のぬけたよう ()
- 18. 背伸びをする ()
- 19. 目先がきく ()
- 20. 後髪をひかれる ()
- (イ) あてつけ
- (ロ) すくんでしまう
- (ハ) あわてる
- (ニ) かなわない
- (ホ) いばる
- (ヘ) くやしい
- (ト) うきうきする
- (チ) ほしくてたまらない
- (リ) かげ口
- (ニ) 気にさわる
- (イ) あつかましい

- (イ) 気がぬける
- (ロ) きがきく
- (ハ) ようじんする
- (ニ) 思いのまま
- (ホ) うらぎる
- (ヘ) むりをする
- (ト) 心のこりがする
- (チ) 急所をつかれる
- (リ) まちどおしい

○ 語句の選択に当って
可能な限り、偏よりがないことを心掛けたことは勿論であるが、そのために特に配慮したことは、小学生の回答に要する集中の時間的制約から20語句とした。数多くの慣用語の中から、僅かに20語句を選択する基準は何としてもむずかしい。従って、まずわれわれは20語にこだわりなく小学生に可能だと思われる慣用語を会員現場教員から学年毎に提出してもらうとともに、一方、辞典類より、身体の一部を含む慣用語を虱つぶしに摘出、その感覚・感情の発現の仕方によって分類を試み、次の如く四分類を得た。

「直射的に感覚に訴えるもの」
「間接的に比喩のように使われているもの」
「視覚をもとにして感じをとまなわせなければならぬもの」
「对人的意識やある立場を示すもの」

敢えて分類してみた意図はこれを基準として、語句選択において、その感覚・感情の発現の仕方が一方に偏らないようにしたためであった。なお、それにしても、20問の限定は狭すぎて危険であるので、50問程度にしぼり、実施に当っては、これを、A型・B型各問だぶりなく、20問毎に分け、なおかつ、先の基準によって働きにおいてA・B型とも平均したものをとした。

但し、基準による分類の各語同数には固執しなかった。その理由は現場教師が各学年毎に任意に提出した慣用語を50問程度にしぼることの方を重要としたからである。従って結果的には基準による分類各語数は、直射的に感覚に訴えるもの7、間接的に比喩のように使われているもの3、視覚をもとにして感じをとまなわせなければならぬもの4、对人的意識や、ある立場を示すもの6となった。

○ 実施日時と実施校
昭和49年10月中

2年生	東京四谷一小・町田南四小
3年生	町田第四小・藤の台小・町田第二小
4年生	玉川学園小・藤の台小
5年生	町田相原小・横浜大正小
6年生	横浜大正小・横浜芹ヶ谷小

被験者数 2年生 A型108名、B型108名
3年生 A型103名、B型101名

4年生 A型104名、B型107名
5年生 A型121名、B型123名
6年生 A型120名、B型119名
(総計) A型556名、B型558名

尚、一年生は設問の意図を解しかねる不安より除いた。各校ともにA型B型の被験者は同一ではない。

二、調査結果と考察

○ 正解者百分率
(注) B型の番号に順序の狂いがあるのは、既述の如くA型に各語の働きに合わせて、比較し易いようにしたためである。

まず全般的な印象から述べてみる。最初問題作成に当り、選定した五〇語程度の語句を理解の度合において、しかも、先に述べたように感覚・感情の発現の仕方において、同程度に、同比重に、A・B両型を配列することは容易ではなかった。結局、A・B両型対照の表Iを参照してもらおうとわかるところだが、概してB型の方が成績が高い。しかし、これがこの程度の語差に止まったことは、現場人の直観の強さとして満更でもない気がするのであるが、これは方法上のこととして別に考えるとして、注目すべき第一のことは、A・B左右各語において、学年ごとのグラフの伸びが殆んど同型に出ていることである。A・B型左右の各語が、

可能な限り、感覚・感情の発現の方向及び性質が似て非なるものを対照して用意したことが影響しているのだろうか。詳しく原因を考えてみたいほどにグラフの型が似ている。感覚・感情の発現のメカニズムとかかわりを持つものかもしれないとすると、今後の重要な手がかりではある。

次に、出来・不出来についてである

が、20語中、50%を超える語は

A型○歯がたたない (4・5・6年)

○目にもみせる (6年)

○口がすべる (3・4・5・6年)

○へそをまげる (5・6年)

○目と鼻の先 (4・5・6年)

以上5語

B型○大きな顔をする (3・4・5・6年)

○目を光らす (6年)

○首を長くする (3・4・5・6年)

○唇をかむ (4・5・6年)

○面あて (6年)

○尻に火がつく (6年)

○胸がおどる (3・4・5・6年)

○のどから手が出る (4・5・6年)

○目先がきく (4・5・6年)

○歯のぬけたよう (6年)

以上10語

の通りで、あまりいい出来とはいえないだけに、却って、これらの慣用語句が習得の過程にあることを裏書きしている。しかし、本調査は、出来不出来を単に調べるためのものではない。むしろ、こうした出来不出来は人間の成長の点より言うなら、何を物語っているのかを問うことであった。あるいは、日本人自身の感覚・感情発現の場所と、発現の習性を探すこととも、おそらく重なった課題である。ただ、本調査が目的としたことの考察に入る前に、今少し、出来不出来に拘泥してみてもよい報告がある。それは既述の如く、この調査実施以前にわれわれは四つに分類の基準を立てた。そして、その四つの種類についてのそれぞれの出来不出来を予想した。その予想は大体、先に述べた基準——つまり、感覚・感情の発現のそれぞれの比較相違において考えていたと思う。この予想が全く結果と一致したのである。もっとも、こういう物の言い方は、占いででもない限り、信憑性がないことも知っている。だが、敢えて書き残そうとするのは、現場教師がそれを予想し得たというより、感覚・感情発現の仕方とそれを可能にする年令のかかわりや、おとなが経験の中に記憶しているということである。おそらく他の一般語句ではこういうこ

とは起り得ないと思われる。感覚・感情の時と場合による特殊な発現の故にあるいはその適応の故に記憶しているのではなかったか。実は、われわれが慣用語句の習得の調査を思い立ったのも、このことと深く関連するところがなければならぬ。いわゆる語句が記憶され習得されているのではないのではないか。言わば、語句はわれわれの脳を刺激するトンツリーでしかない。トンツリーはトンツリーとしか聞えようがないはずである。しかし、人間は、耳に入る一次音声から二次音声へ、更に三次、四次とこの音声に対する感覚受容を改めていく。この道程のどこかが一般語句であり、どこからかが慣用語句だともいってよい。そして、もはや慣用語句の段階に入ると、語句としての記憶よりも、語句としての記憶を離れて、感覚・感情の適応が記憶の対象であったということである。だから、その記憶の順次性は、案外確かなものとして、おとなは残しているのだと思う。

今は直接的に、現場の国語教育の指導面に筆を伸ばすところではないが、慣用語句の指導法は抜本的に改めなければならぬことだけは確かである。語句指導ではなかったというこでの思いつきは記しておきたい。

具体的には別表Ⅱを参照されたいが、

表 Ⅱ

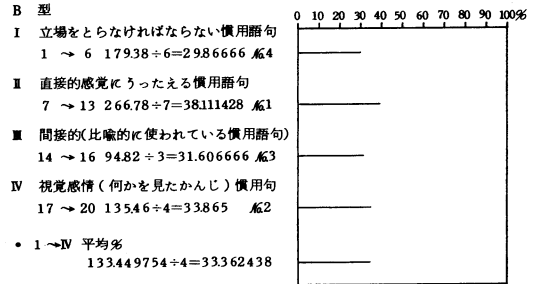
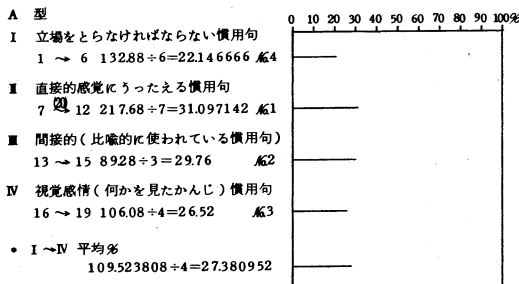
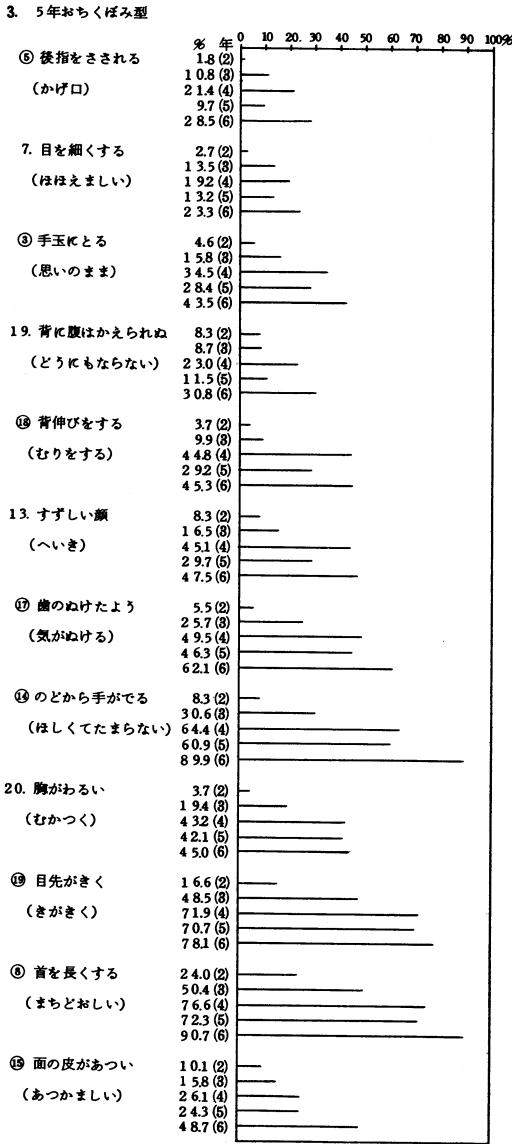


表 III



慣用語句に出来不出来があるということは、人間の感覚・感情の発現・適応に、過程的発達があることと二分できないことであった。

これまで述べて来た予想とは異なり、ふだん考えてもみていなかったグラフの伸びにおける落ちこみ現象については報告し、考察せざるを得ない。従って、別表Ⅱ1〜7の各グラフを作成した。表の内容は、

1. 学年毎に、順序よく素直に正解者の数がふえている語句とその百分率
2. 1の如くであるが、頭打ちになるもの(上級学年で伸びが停滞する)
3. 五年生で、グラフが陥没するもの、(以下五年落ちくぼみと称する)
4. 3ほどではないが、三年生で、グラフが陥没するもの(以下三年落ちくぼみと称する)
5. 三年・五年において前学年より稍々低率となるもの(という言い方よりも、全体的にグラフの伸びがわるいものというべきかもしれない)
6. 四年・六年において、足踏み状態、あるいはそれ以下の低率となるもの(全体的に言えば、三年〜四年停滞、五年〜六年停滞と見るべきものである)
7. 三年・四年において足踏み状態

を示すものとなる。

一体、何故このような慣用語句習熟の過程に乱れを生ずるのか。特に、3における五年生の落ちくぼみは何と説明されるべきなのか。われわれも、この結果を見て、どこかに調査上のミスがあったのだからかと疑いを持った。しかし、どの調査校においても、同じ傾向を示したために、調査の誤りがあったとはいえない。ではどう考えるべきか。特に、この五年の落ちくぼみの中で顕著な例を上げると、

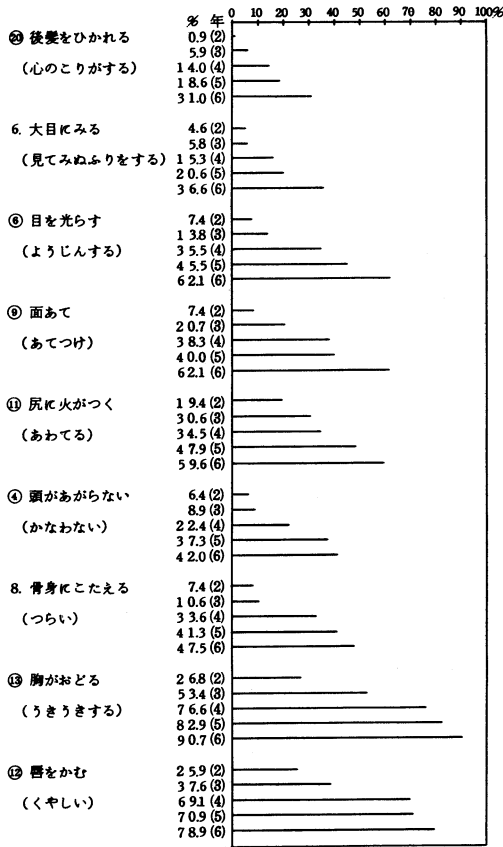
すずしい顔(へいき)二年8%・三年16%・四年45%・五年29%・六年47%

他に名を省略して、ことばだけを掲げると、後指をさされる(かげ口)・目を細くする(ほほえましい)・手玉にとる(思いのまま)・背に腹はかえられぬ(どうにもならない)・背のびをする(むりをする)・歯のぬけたよう(気がぬける)・のどから手がでる(ほしくてたまらない)・胸がわるい(むかつく)・目先がきく(きがきく)・首を長くする(まちとおしい)・面の皮があつい(あつかましい)

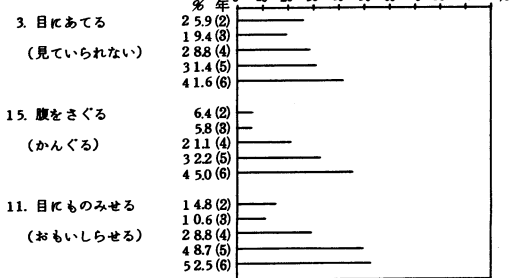
以上12語 これらの語に共通する感覚・感情の発現の仕方考えるとき、われわれは五年生のこの落ちくぼみをあらわ

番号の無印はA型、番号の○印はB型

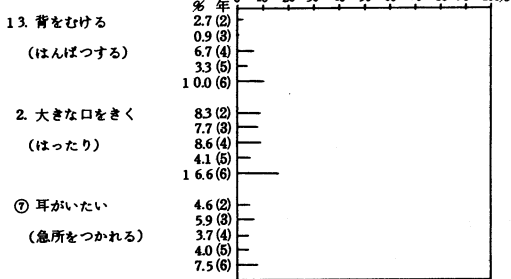
1. 学年にしたがってのびていく型



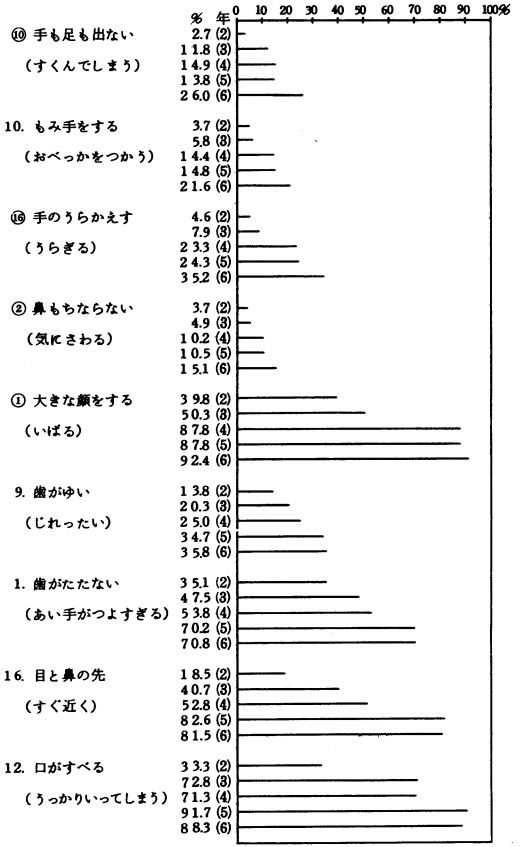
4. 3年おちくぼみ型



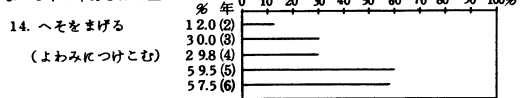
5. 3年5年おちくぼみ型



2. 学年にしたがってのびていくが上級学年であたまうちになる型



6. 4年6年あしぶみ型



7. 3年4年あしぶみ型

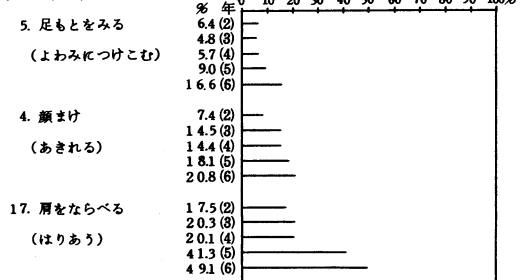


表 IV

5年生おちくぼみ ○は正答 ×は誤答

A 型

7. 目を細くする	○ほほえましい	13%	——
	×みてみぬふりをする	13%	——
	×見ていられない	28%	——
13. すずしい顔	○へいき	29%	——
	×みてみぬふりをする	10%	——
	×ほほえましい	34%	——
19. 背に腹は かえられぬ	○どうにもならない	11%	——
	×よわみにつけこむ	11%	——
	×はったり	11%	——
	×おべっかをつかう	10%	——
20. 胸がわるい	○むかつく	42%	——
	×きげんを悪くする	16%	——
	×つらい	9%	——

B 型

3. 手玉にとる	○思いのまま	28%	——
	×ほしくてたまらない	9%	——
	無答	18%	——
5. 後指をさされる	○かげ口	9%	——
	×急所をつかれる	15%	——
	×うらぎる	12%	——
	無答	8%	——
8. 首を長くする	○まちどおしい	72%	——
	×ほしくてたまらない	5%	——
14. のどから 手が出る	○ほしくてたまらない	60%	——
	×すくんでしまう	4%	——
	×びっくりする	4%	——
	無答	6%	——
15. 面の皮があつい	○あつかましい	24%	——
	×気にさわる	6%	——
	×心のこりがする	6%	——
	×かげ口	7%	——
17. 歯の抜けたよう	○気がぬける	46%	——
	×心のこりがする	7%	——
	×気にさわる	7%	——
	×あわてる	5%	——
	無答	8%	——
18. 背伸びをする	○むりをする	29%	——
	×気がぬける	15%	——
	×思いのまま	6%	——
	無答	12%	——
19. 目先がきく	○きがきく	70%	——
	×ようじんする	4%	——
	×思いのまま	3%	——
	無答	8%	——

しているのか、容易に思いつくことができる。決して、五年生がそれ以下の低学年に劣っているわけではなかった。彼等たちは知能の発達のために、慣用習得に混乱を起したのである。共通するこれらの語は、対人関係において、多分に感覚・感情的な対人的意識ならびに対人評価である。このことが、彼等たちに直観できなかつたわけではない。彼等たちは、かならずこの方向に、彼等たちの態度を設定したにちがいない。しかし、そのことがわかればわか

るだけ、つまり余裕のある思考が入るだけに彼等たちの感覚・感情の発現そのものからは遠のいて行ったと言えないか。簡単な例でいえば、彼等たちはいわゆる答案式に考えたのである。それだけに五年生以下の者たちが自分の感覚・感情に素直に回答を聞いた成績よりも下まわってしまったのではなかったろうか。いまは今後の指導方法には触れない。しかし、この五年の落ちくぼみは、決してそれ以前の四年の結果より無力なものではないことをわれわ

はわきまえておかねばならないと思う。つまりこの場合、間違つたのは、彼等が成長したのだということである。表Ⅲの3について述べたのであるが、このことは、他の停滞・混乱についても言えることだと思ふ。慣用語句の習熟は単に、一般語句としての記憶の問題ではない。必ず、感覚・感情の発現・あるいは適応の故に、人間成長段階とかかり合い、そこに取捨選択が行われるものであること、簡単に言えば、感覚・感情と思考との出会いによ

るくせの獲得であつたということである。慣用語句に習熟することは、過不足のないように、自己の感覚・感情と思考との妥協点を見出さなければならぬことになる。その故にこそ、最も感情的にも思考的にも揺動的な五年生の段階で混乱を起したと見たい。別表Ⅳは、その証しとして、五年生の誤答の傾向と正答・誤答の高率のものを示したものである。五年生がよく考え、体感でなく、知的に処理していることがわかると思ふ。(東京・南四小・教諭)